

た。百万遍から西え、亂の森、下賀茂神社の橋を渡って出町に出て、同志社の裏手を通る。勉強以外の色々のお話を伺ったが、なかでもドストエフスキーについて色々話され、私にドストエフスキーの小説を読んでみるように勧められた。それまで私はトルストイのアンナカレーニナくらいしか読んでおらず、ロシアの作家はヨーロッパかぶれらしいと思って、たいして関心を持たなかったのであるが、重厚でロシアの土の臭のするドストエフスキーの小説にはすっかり興味をひかれた。音楽については、子供の頃、ひとなみにシューベルトだ、ショパンだと騒ぎ、大学時代にチャリアピンを聴いてムソルグスキーに傾倒していたが、先生はワグナーの音楽の良さを教えて下さった。ワグナーの「さまよえるオランダ人」のレコードをお宅で聴かせていただいたことは今でも強く印象に残っている。吉田中大路に御転居ののち、しばらくの間、御令息雄豪君の家庭教師を勤めさせていただいたが、これも学習ののち、先生のお部屋に報告にゆき、お話を伺ったり研究の指導を受けたり、どちらがサービスしているのか判らないような次第であった。

先生はお酒がお好きであったが、この点、私は不肖の弟子であった。お正月には研究室の先輩がたは先生のお宅に押しかけて新年宴会をしていられた。一度だけ祇園にお伴したことがあるが、先生は歌われるでもなく、杯をかたむけながら、若い連中がはしゃいでいるのをいかにも楽しく満足そうに眺めていられた。昔の先生がたは沢山の弟子を引き連れて時々呑みにゆくくらいのサラリーをもらっていたのであろうか。荒木先生は熊本

出身で、生涯古武士の風格をもっていられたが、それと同時にドイツ的なモダンなセンスも身につけていられた。

第二次大戦の近づくにつれ、先生は国粹的な傾向を強めてゆかれた。研究室の床をあげて畳を敷き、坐り机をおいて勉強していられた。研究室の論文集も、英文のものと共に邦文のものを新しく発刊された。先生は筆のたつ方であったから、天文学普及についても啓蒙書を多く書いていられる。神戸の実業家笹部氏の要請を受け、啓蒙誌「天文」を編集されたこともある。この中には新城新蔵先生の記念号も出されている。

戦争がはじまり、先生は愛国的な活動に積極的に参加されたが、終戦と同時に大学を退官され、丹波の寒村夜久野にひきこもられた。悠々自適の生活のなかで、恒星社の故土居客郎氏の要請もあり、幾冊かの啓蒙書を書いていられる。研究室に残されて途方にくれたのは上野季夫氏、川口市郎氏、服部昭氏などであるが、その後これらの人達は先生のあとをつぎ、徐々に研究室を再建して今日に至っている。

先生の弟子の一人である高木公三郎氏がよく言っていたように、荒木先生はこのままで納まる方ではなかった。やがて京都に産業大学を創立され、これも先生の弟子の一人で実業界で活躍していられた磯村咄夫氏がこれを助けられ、数年のうちに立派な総合大学と発展させられた。先生の育てられたこの大学は一般社会での評判もよく、これからも増々発展してゆくことであろう。京都大学の宇宙物理学教室と共に、先生の巨大な記念塔ともいえよう。

桁外れ——荒木先生の憶い出

藪 内 清

昨日(8月8日)仙台から京都に帰ってきた。よんどころない用事(?)で七夕祭りでごったしがえている仙台を訪れなければならなくなった。6日に大阪空港を立ち、2時間半ほどで花巻空港に着き、花巻温泉に一泊した。7日には東北本線で屋前の仙台につき、七夕祭りを見物したり、天文台、博物館、城跡などを見てまわり、その日は仙台で一泊した。7人ほどの団体であったため、当地の旧知にもお目にかかれず、その点では不本意な旅行であった。仙台までの往路は、飛行時間と東北本線の時間をあわせて4時間あまり、帰途は列車に乗っている時間が7時間あまりであった。仙台行も便利になったが、もし直接に飛行機で仙台へ行けば、大阪から2時間あまりで到着することができるであろう。

今度の仙台行きは花巻で道草を食った。私が最初に仙台へ行ったのは、昭和8年4月初めにここで催された日

本数学物理学学会に出席するためであった。この時の旅行は、今度の旅行と同じように、途中で道草を食った。それもやや異常な道草であった。私が京都大学理学部宇宙物理学教室を卒業したのは昭和4年であるが、卒業と前後して主任教授の新城新蔵先生は京大総長となり、上田穰、荒木俊馬の両先生は海外に留学された。教官として残ったのは山本一清先生ただ独りで、急いで講師であった竹田新一郎さんが助教授に昇進され、さらに学外から百濟教猷先生を助教授に迎えてどうやら格好をつけたのである。卒業したばかりの私たちは指導教官を失って途方に暮れたというのが、当時の実情であった。やがて2年の留学を終えて上田・荒木の両先生が帰朝された。空いた1つの教授席は上田先生によって埋められ、荒木先生は助教授のままに残された。

昭和8年の仙台行は新婦朝の荒木先生に引率された修

学旅行といった形で、竹田、能田両先輩のほか、すでに亡くなった上谷良吉君が加わった。そのほかに天文学関係で誰がいたかは私の記憶にない。みんな若い連中で、リーダーの荒木先生が36才であった。この旅行の第1夜は汽車の中ですごし、翌日は新潟で一泊した。私の記憶が正しいなら、新潟までの鈍行は実に19時間かかったように思う。早春のころで親不知あたりの海岸にはまだ雪が残っていた。新潟には能田先輩の叔父さんがある新聞の支局長をやっておられ、大歓迎を受けておそくまで飲むことになった。その翌日は東山温泉泊りであった。会津は新城先生の郷里であって、先生の甥にあたる方が酒造業をやっておられ、会津若松駅に出迎えられた甥御さんは何本かの銘酒を持参しておられ、温泉の夜はにぎやかな酒宴となった。ここまではよかったが、仙台へ出発する日の朝に風呂にはいってさっぱりしようとしたのがいけなかった。先日の花巻温泉でも湯があつくて風呂にはいれなかったが、夏のこととてどうということはない。東山温泉の朝も湯があつく、裸になったもののどうにもならず、風邪を引く仕末となった。仙台ではすでに先年亡くなられた松隈先生に迎えられて宿に着いたが、健康にめぐまれていなかった竹田さんが肺炎をひきおこし、荒木先生や能田さんも軽い熱を出される仕末となった。年の若い私と上谷君だけは無事で、病人は松隈先生に頼んで2人は一足早く仙台を引きあげることになった。この学会への旅行は実にさんたるものであった。しかし、途中は物見遊山といった旅行で、ペーパーを発表する予定は私一人で、それは無事に終えることができた。

まじめな読者はぜひぶん不謹慎な旅行をしたものだと非難されるかも知れない。遠い仙台まで行くにしても、列車の中に入れると途中で3泊し、それも毎晩のように飲んで疲れた挙句にやっと目的地に着き、学会への出席もできないで寝込んでしまったのである。しかし今からほぼ50年以前のノンビリした時代のことで、その点は酌量してほしいものである。この旅行の計画はもちろんリーダーの荒木先生で、にぎやかなことが好きで、他人の思惑などをいささか無視して行動する天衣無縫の性格が、この旅行にも反映していると思える。「白玉の歯にしみとほる……」の歌を愛された先生は、酒の席をことのほか好まれた。歌の文句とはちがって、それも大勢の人を引きつれて飲むのが好きであった。当時の助教授の月給がどれほどであったかは知らないが、私たちはぜひぶん酒席に連れられて行った。私たちだけでなく、各地の学者たちが来ると必ず料亭に連れて行かれた。荒木先生の晩年には、畑中武夫さんなんか先生とよく飲まれていた。

もちろん先生は弟子たちを連れて酒ばかり飲んでいただけではない。卒業して変光星の研究ですぐれた業績を

挙げられ早く学位を受けられた。当時勃興していた量子物理学にも深い関心を示され、山本一清先生が主宰していた「天界」にこの方面の外国文献を記載されたことがあった。先生の講義は実に魅力があった。私は昭和3年のころ特別に先生に頼んで量子物理学の講義をしてもらったことがある。その席には若い頃の湯川・朝永の両君も出席していた。当時の京大理学部では数物系の学生は低学年の時に同じ講義を聞いたので、私もこの両君と知りあっていた。後年荒木先生が2人のノーベル受賞者に量子物理学を教えたことがあるといわれたのは、この時のことである。

先生は親分肌の人であった。しかしやはり学者であって、いわゆる清濁あわせてのむとといった政治家ではなかった。上にも述べたように天衣無縫で、自分の思うままに行動されるようなところがあった。大東亜戦争がはげしくなるとともに、学者としてはやや逸脱して政治的なことに関心をもち、いくらか勇ましい発言をされた。思想的にはやはりリベラリストであったが、学者としていくぶん血の気の多かった先生は、時代の流れに抗することができなかったのであろう。先生は熊本県の出身で、やはり同郷の先輩である京大名誉教授の狩野君山先生は荒木先生の言動を大へん心配されていた。君山先生は荒木先生の岳父である新城先生と親交があり、単に同郷の先輩としてでなく、荒木先生を早くから知りその学問を認めておられた。「学者は政治などに関係してはいけない」というのが君山先生の持論であって、時には直接荒木先生をさとされたのではないかと思う。君山先生が所長をしておられた東方文化研究所に勤めていた私は、昭和19年のころ君山先生と接触する機会が多く、その時にそうした話を聞いたことがある。忌憚なく言うところ熊本県人は独特のアクの強さがあった。しかし学者としては2つのタイプがあったように思われる。1つは君山先生のようなタイプ、いま1つは徳富蘇峰のようなタイプである。荒木先生はどちらかというところ蘇峰のようなタイプでなかったかと思う。蘇峰のことをよく知らない私だが、こんな分類をやることはどうも学者らしい発言ではないが、ただ君山先生とはよほどちがった熊本県人であったことは確かであった。

昭和13年に山本一清先生が辞職され、やがて荒木先生が教授になられた。しかし20年の敗戦とともに先生は辞職され、京都府と兵庫県の境に近い上夜久野に移られ、再び学究の生活がはじまった。恒星社の依頼を受け、天文学のあらゆる分野についての専著を書き上げられ、出版された。それが何冊になったかよく憶えていないが、10冊を越えたことは確かである。そして最後に膨大な1冊の『現代天文学事典』となって結晶したのである。書かれた専著は決して概説的なものではなく、何れも程度

の高いものであった。参考文献も少ない僻地で、よくこれだけのものを書かれたものと驚くほかはない。時々この上夜久野の地を訪れたが、2階が仕事場であり、時には食事を2階に運ばせ、執筆しながら食事をされたようである。まだ還暦の前後であったが、「自分も年だ。別に運動をしなくても健康を害することもなからう」と言っておられた。健康には恵まれた方であった。

それにしてもこうした一連の仕事は、恐らくこれからも個人で実行できる学者は出ないことであろう。この小事だけでも、先生は桁外れの人であった。

敗戦後の十数年はこうした著述の中で送られた。ようやく世の中が改まったが、先生の大学復帰はついに実現しなかった。これには私の責任は重大であるが、いまここでその間の経緯を書く余裕はない。ただ私自身の寛容さが足りなかったことを深く反省していることを書き添

えておきたい。

先生の最晩年はまことに順風に帆をはらませた航海のようであった。独力で京都産業大学を設立され、総長として学校経営にすばらしい成績を挙げられた。停年でやめた京都大学の諸教授を集め、歴史の古い立命館や同志者に拮抗する大学に育てあげられた。そうした生前の功績は盛大な葬儀に象徴されるのである。

荒木先生は多才な人で、書も絵も上手であった。またなかなかのロマンチストで、叙情的な名文をよくされた。最初の欧州留学の時、目的地のドイツにはいる前に、イタリア各地をまわってシチリアにも足をのばされた。鷗外の『即興詩人』ばりの文章でお便りを頂いたのは、半世紀前のなつかしい思い出である。先生は道草を食いながら、結構普通人の2倍も3倍もの仕事をやりとげられた。やはり異常の人である。(1978.8.9)

荒木先生の思い出

——略歴補填の意も含めて——

清 永 嘉 一

京都産業大学の構内には、蟬しぐれの中、夾竹桃の桃紅色が今を盛りと咲き誇っている。この花が好きだった先生は今はない。先生とのお付合は40余年にわたり、戦前の京大宇宙物理学教室の時代、戦後の夜久野閑居、そして京産大の時代とそれぞれに思い出はつきない。請われるまま、回想の筆を執り、先生の霊に捧げる。

まず、先生の海外旅行について略歴の補足をしておきたい。ドイツ留学(昭和4年1月17日出発、シベリヤ経由で昭和6年5月22日帰学)中は、暇を見て西欧各地を勢力的に旅行され、その見聞記を奥さんやお子さんなどへの通信に丹念に書残されており、その際のスケッチも一部ではあるが絵巻物の形で残されている。ドイツ語の正当な勉強にはオペラが第一であるという、その言葉通りに、オペラもよく見に行かれたようで、その状況は奥さんなどへの便りに詳しい。字物教室時代には、昭和9年1月の南洋群島ローソップ島日食観測、昭和11年6月の北満(現在の中国東北部)呼瑪日食観測に遠征され、呼瑪日食観測後に上海自然科学研究所(所長は岳父新城新蔵博士)を訪問、昭和16年9月の中華民国漢口の日食観測にも指導者として参加、その間、昭和14年4月には日支事変で荒廃した南京紫金山天文台の復興に森川光郎(故人)、高木公三郎両氏らと共に協力された。京産大創立以後は、昭和40年7月に香港・マカオ;昭和42年2月に台湾台北;昭和42年8月には西ドイツ、スイス、イタリア、フランス、英国、米国、カナダ;昭和46年7月から2ヶ月余フランス、英国、西ドイツ、オーストリア、イタリア、マルタ共和国、米国;昭和47年5月には

東欧共産圏諸国;昭和48年9月にはコペルニクス生誕500年記念国際学術会議における記念講演(“Der Mensch und der Kosmos”)のため病を押してポーランドへ;昭和50年7月にはNASAの招待で米国へ;昭和51年5月にはBritish Councilの招待で英国にわたり、Azerbaijan研究所長の招きでヨーロッパ・ロシアの各地を;昭和52年4月韓国;同年7月には政府の招聘でニュージーランド及びオーストラリアへ旅行されているが、その多くは大学・研究所の制度・研究体制・教育の実状調査並びに文化交流を目的とするものあり、或は京産大世界問題研究所の若泉教授を伴って知名学者や思想家を訪問交歓されている。

昭和48年初夏の病気以後は自ら機能回復に努力され、本年6月29日には、京産大の天文学関係の先生方及び天文同好会の学生達と酒を酌み交しながら、「人間は限度を知って自ら節しなければならぬ」と気炎をあげ上機嫌だったし、これが先生と同席した最後になるうとは夢にも思わなかった。思えば、創設10余年の私立大学の創立者であり、総長であった先生には、精神的にも肉体的にも大きな負担がかかり、他方、大学の関係者も甘えて些細なことにも総長の手をわずらわすという不手際がなかったであろうか;先生は本年7月7日から9日まで北陸金沢へ出張し、7月10日には京産大本部で柏副総長らと会談、昼食を共にし、帰宅後も元気だったが、午後4時頃に背中を痛むを訴えられ、午後7時すぎ大往生をとげられたのであった(病名は心不全)。当日、私は朝から大阪へ行き、午後9時40分頃に帰宅して悲報を知り、耳を